

推理小説

警視庁捜査一課の検挙率NO.1刑事、「無駄に美人」な変人、雪平夏見。今回彼女が担当するのは、なんの関連性も見いだせない人々が次々と殺されていく連続殺人事件。事件をつなぐカギは事件現場に残された「アンフェアなのは、誰か」と書かれた葉だけ。捜査が難航する中、とある出版社に届けられたのは誰も知り得ない事件の詳細と次の殺人予告が記された推理小説の原稿、そして「事件を防ぎたいければ、この小説の続きを落札せよ」という要求だった――。

2006年に放映された大人気ドラマ『アンフェア』の原作小説であるこの作品は、『天体観測』や『ドラゴン桜』など数々のテレビドラマの脚本を務めた秦建日子のデビュー作だ。ドラマ脚本の経験を生かして作られたこの物語は、複数視点で語られているにもかかわらず、ややこしさがなくて非常に読みやすく、加えてどんどん続きが読みたくなるような独特の「引き際」を持っている。コミカルな文体もあいまって、サクサク読める非常にお手軽な1冊である。

しかしそんな軽い印象とは裏腹に、この作品は強いメッセージをその内に秘めている。というのも、「推理小説」というタイトルを冠しているにもかかわらず、この物語の根幹に流れているテーマは、現在の推理小説界のあり方に対するアンチテーゼだからである。読者に対してフェアであり、なおかつリアリティがある作品だけを認め、そうでない作品は評価しない。そんな了見の狭い読者たちに、この作品は訴えかけているのだ。君たちの求めるリアリティのなんて都合のよいことだろう、と。リアルとはそもそもアンフェアなものではないのか、と。推理小説好きの人にとっては、今一度推理小説との向き合い方を考えさせてくれる1冊かもしれない。

推理小説ならではのスリルを味わいながら、推理小説そのものについて考えさせられる、そんな1冊。ぜひ一度読んでみてはいかがだろうか。(IV)



『推理小説』
河出文庫
著者：秦建日子
定価：620円



「――アンフェアなのは、誰か」

はみだし
すてーじ

お金より時間が欲しいです。だから、誰かお金を下さい。
⇒難しくても言ってるかわかりません。

(理・3 ad)
(哲学だといつとこまでわかりました；編)